

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02525

研究課題名(和文) 雲南諸言語の地理言語学的研究

研究課題名(英文) The Geolinguistics of the Languages in Yunnan

研究代表者

遠藤 光暁 (Endo, Mitsuaki)

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号：30176804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：雲南に分布する中国語・タイカダイ語族・チベットビルマ語派・ミャオヤオ語族に関して鼻音韻尾の -m, -n, -ng がどのように変化するかをタイプを同じ記号で色分けして地図化し、重ね合わせることによって共通する傾向や相互関係を跡づけた。特に雲南中国語につき声調のタイプわけを行い、地図化してそれらの形成過程を推定した。また同じく中国語に属する山東方言について近年の三段階からなる時系列言語地図を作成しその変化過程をきめ細やかに跡づけた。雲南にも分布するタイカダイ語について語彙・音韻・構文にわたる8項目の地図化と解釈をし、英文で成果を公刊した。語族を超えた変化過程の実例を多く見出した。

研究成果の概要(英文)：The modification of the nasal codas -m, -n, and -ng among the Sinitic, Tai-Kadai, Tibeto-Burman, and Hmong-Mien languages distributed in Yunnan are indicated in the maps with the same symbols, distinguished by colors. The common tendencies and mutual relationships of these languages were traced by superimposing these maps. In particular, the tones of Yunnan Chinese were classified into types, the results were mapped, and their formation process was reconstructed. The time series maps exhibiting the recent three stages of the Chinese Shandong dialects were drawn and their corresponding changing process was traced. The mapping and interpretation of these languages was based on eight elements that consisted of the lexical, phonological, and syntactic features of Tai-Kadai, which is also distributed in Yunnan, and the results were published in English. Concrete examples of the linguistic changing processes apart from the language families were discovered.

研究分野：言語学

キーワード：言語地理学 近過去の言語変化 タイカダイ語族 中国語 方言 声調 相対的順序 絶対年代

1. 研究開始当初の背景

雲南には、漢語西南官話のほか、チベット・ビルマ諸語、タイ・カダイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語、オーストロアジア語が分布し、アジアの十数個の語族のうち5種類が分布している。中国の26省の範囲のみならず、アジア全体の観点からしても、もっとも語族がひしめきあっている地域であり、諸民族の交差しあう宝庫と言える。

こうした諸言語の調査報告は既にかなり多く出ており、それを総合的に研究する下地は十分整っていると云えた。そこで、専門とする中国語方言のみならず、かなりの蓄積を積んできたタイカダイ語を中心として地図化を行い、それぞれの語族の各種言語特徴の形成過程を跡づけ、相互関係について具体的に考察することを目指した。

この個人の研究計画と平行して、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所において2015年度から2017年度までの3カ年の共同研究プロジェクト「アジア地理言語学研究」を申請していたが、幸い採択され、30名ほどの共同研究者とともにアジア全域の2000地点から4000地点の密度で8項目の地図化と解釈を進めることができた。

2. 研究の目的

一つは語族ごとの地図によって地理分布とその形成過程を推定することであり、これは既に確立されたクラシックな方法論による。

いま一つは語族を超えて同一特徴が分布する現象を地理的に跡づけ、言語接触による拡散の過程を多く見つけたいと思う。既にパイロットケースについては、広西チワン族自治区の漢語とチワン語のlhやthについて語族を超えてほぼ同じ地域に分布することを地理言語学的に示したことがある(遠藤2013)。このような事例を更に多く具体的に論ずることを目的とする。

実際には、声調に関して中国語方言につき雲南省の調類・調値の両方に着目したタイプわけを行い、地図化とそれぞれのタイプの形成過程を論じた。また方法論的に近過去の三段階の地図を比較した「時系列言語地図」の方法を山東省の中国語方言に適用し、具体的な成果を挙げ得た。

また、鼻音韻尾が-m, -n, -ngの3つを保つか、2つに合流したか、1つだけか、全く失ったかというタイプわけを雲南の各語族に対して行い、同じ記号を使って地図化し、色わけすることにより、重ね合わせて語族間の相互関係を見ることができた。これも新たな方法論を開拓するという目的を到達した一例である。

3. 研究の方法

ArcGIS Online を使って地図化を行った。これは高性能で現今の地理情報システム(GIS)の世界標準となっているArcGISがネット上で無料で使用できるものであり、言語地図を描くには十分な機能を備えている。

これにより雲南省のみならずアジア全域の全語族を統一的に扱うことが可能になり、また個別地域を別々に地図化したものをつなぎ合わせることも容易にできる。

違う特徴を重ね合わせることも容易にできるため、この機能を活用して例えば子音と母音といった言語特徴間の相互関係も具体的に跡づけた。

同じ語に遡るかを同定するには比較言語学的な知見が決定的に重要である。中国語方言については雲南はかなり単純なので問題なくそれを踏まえて論を進めることができたが、そのほかの語族については特にタイカダイ語に関して李方柱の業績を主として参照した。しかし21世紀に入ってからこの分野は著しい進展を遂げており、一層 up to date な扱いが必要であると痛感している。

そのほか、言語地理学的な諸原理も適用し、またこれまで具体例が論じられることが少なかった語族を超えた相互関係を多く発見することも期待され、現にかんがりの実例が見出された。

4. 研究成果

(1) 2015年度には「雲南漢語方言声調系統的地理分布和譜系関係」と題する発表を2015年10月24日にチベット・ビルマ諸語/タイ・カダイ諸語研究会、於神戸研究学園都市UNITYにて行った。これは雲南省の中国語100地点以上について声調体系の地理分布を言語地図化し、その系統関係を推測したものである。

また、“Problems in Yunnan Dialect Geography, with special reference to the Yunye Yitong 韵略易通”と題する発表を2016年3月10日にInternational Workshop on the History of Colloquial Chinese (at Rutgers University)にて行った。これは雲南の諸言語、中国語・チベットビルマ語・タイカダイ語・ミャオヤオ語・オーストロアジア語の諸方言において、am/an/angという韻母の体系が弱化合流していくプロセスを言語地図に描画して追跡したものである。その結果、チベットビルマ語において鼻音韻尾の消失や合流が最も大きく進行しており、中国語雲南方言はそれと類似した側面もあるが、異なった点も少なくないことが明らかとなった。

こうした研究を通して、既に雲南省の主要言語群の諸方言のかなりをカバーする地点について描画化する基礎作業も完了し、次年度以降のより系統的な研究の出発点とすることができた。また、雲南とその周辺(タイ・ラオスなども含む)の中国語およびタイカダイ語のいくつかの方言の主として声調について現地調査を行った。関連する諸資料の文献収集も系統的に行い、特に地方誌に収められた中国語方言の記述はほぼ網羅することができた。

2015年10月に中国語で行った「雲南漢語方言声調系統的地理分布和譜系関係」と題する口頭発表を日本語で「雲南中国語方言の声調体系の地理分布と系譜関係」として論文化し、神戸市外国語大学の『アジア言語論叢』に寄稿した(2016年12月に刊行済)。本論文は雲南省の中国語方言136地点について声調体系の地理分布を言語地図化し、おのおののタイプの間の系譜関係を推定したものである。

(2) 2016年度の研究成果としては、2016年11月に「20世紀以来漢語幾個方言聲調調値史」と題する論文が『漢語研究の新貌 方言、語法与文献 献给余霏芹教授』、香港中文大学中国文化研究所吳多泰中国語文研究中心より刊行された。これは雲南方言と関連する中国語諸方言における近年に生じた声調変化を追跡したケーススタディである。

2017年3月には主として山東方言について20世紀半ばから21世紀にかけて出された声調記述を1940年代・50年代・80年代以降の3つの時期について別々に言語地図化し、その間に生じた調類の合流のプロセスを細かに跡づける研究を行った。これは山東方言ではこのような短いタイムスパンにおいてかなり大きな声調変化が認められたため特にこの地域を選んだものであるが、時系列地図を言語地理学に導入するという意味で雲南を含む他の地域の研究に対しても貢献するところがある。そのプロセスにおいて、Franz Giet 神父が1940年代に行った声調を始めとする音声特徴の言語地理学的記述が大きな意義を持つに至っていることを認識した。またこの30年来に中国で行われた方言調査の地点密度が非常に濃くなってきており、それを統一的に取り込む必要性も痛感された。

(3) 2017年度には、雲南における多言語状況につき、特にタイカダイ語に重点をおいて言語地図化を行った。声調については隣接するタイカダイ語族全体も含めて400地点程度の密度に上った。「雨が降る」についても語順が中国語に近いほど「降雨」型となり、中国領以外では「雨降」型となり、より古い語順を保っていることが確かめられた。また、「雨」「降る」のそれぞれの語形の通時的形

成過程についても具体的な推測を行った。それを通じて、音節頭子音と主母音の間に相関が見られ、どちらが引き金となって他方の変化を惹起したかについて「より広い分布」という原則を立てた。これはマルティネの言う連鎖変化のような緊密に関連した言語特徴に関して有効な原理となるものと考えている。

また声調の地理言語学的研究として戦前の広範囲のかなり高密度の地理言語学的研究が行われている北方語につき、更に1950年代と1980年代以降の3つの時代の地図を描画する「時系列言語地図」の実証的研究を特に山東方言につき行った。また二音節の連続変調と軽声前変調のタイプについても方言地図化し、一地点だけ見ていたのでは分離し得ないそれぞれの組み合わせごとの形成年代と音声的過程について地理分布の広狭や重合情況に基づき変化過程を跡づけることを示した。また近過去の三段階の地理分布の広狭の相対的關係によって調類ごとの変化の発生順序を絶対年代とともに20年程度の精度で跡づけることができ、またその結果と軽声前変調の地理分布を突き合わせることで軽声前変調の調類ごとの形成順序を実証的に明らかにし得た。これらは方法的に重要な前進であり、今後諸方言・諸言語に適用できるものと考えている。

雲南諸言語の方言地図についてもスワデッシュ100語の基礎語彙に関して描画を着手している。

(4) 全3年度を通して2015年度から2017年度に東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所において行った共同研究プロジェクト「アジア地理言語学研究」と密接にかかわっており、私は全体のコーディネーターの他にタイカダイ語も分担した。雲南を含むタイカダイ語全体において「太陽・稲・風・鉄・乳・名詞の数え方・声調アクセント・雨が降る」の8項目に関する地図化と形成過程の解釈を行った。東南アジア言語学会で地理言語学に関するワークショップを組織し、またアジア地理言語学会をカンボジアとインドネシアで開催した。そうした成果はAA研の電子出版物として速やかに英文で公開してある。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

遠藤光暁, 山東方言単字調の時系列言語地図, 経済研究, 6, 1-37, 2018, 査読無

遠藤光暁, 雲南中国語方言の声調体系の地理

分布と系譜関係, 神戸市外国語大学外国学
研究, 92, 127-133, 2016, 査読無

Mitsuaki Endo, Geographical Distribution
of Tone in Tai-Kadai, Keizai Kenkyu,
Aoyama Gakuin University, 7, 1-31, 2015,
査読無

〔学会発表〕計(6)件/うち招待講演 計
(1)件/うち国際学会 計(5)件

Mitsuaki Endo, Correlation between onset
and vowel, and the principle of "wider
distribution" as revealed in the changing
process of the forms for "rain" in
Tai-Kadai, The Fourth International
Conference on Asian Geolinguistics (国際
学会), 2018

Mitsuaki Endo, Asian geolinguistics: So
far, and beyond, The 27th Meeting of the
Southeast Asian Linguistics Society (国
際学会), 2017

遠藤光暁, 山東方言単字調の時間系列語言地
図, 第四屆地理言語学国際學術研討会(国際
学会), 2017年

遠藤光暁, 声調演变的双向性--兼談声調的共
時性質和年齡差異調查的重要性, 南開語言学
論壇(招待講演)(国際学会), 2017年

Mitsuaki Endo, Problems in Yunnan Dialect
Geography, with special reference to the
Yunlyue Yitong 韵略易通, International
Workshop on the History of Colloquial
Chinese, at Rutgers University, USA (国
際学会), 2016

遠藤光暁, 漢語方言声調系統的地理分布和譜
系關係, チベット・ビルマ諸語/タイ・カダイ
諸語研究会, 於神戸研究学園都市 UNITY, 2015
年

〔図書〕計14件

S. Shirai & M. Endo (eds.) Studies in Asian
Geolinguistics VIII, ILCAA, TUFS, 85, 2018

H. Suzuki & M. Endo (eds.), Proceedings of
the Workshop "Geolinguistic Method and
Southeast Asian Linguistics", ILCAA, TUFS,
79, 2017

Mitsuaki Endo (ed.), Studies in Asian
Geolinguistics VII, ILCAA, TUFS, 79, 2017

K. Kurabe & M. Endo (eds.), Studies in
Asian Geolinguistics VI, ILCAA, TUFS, 59,
2017

Y. Taguchi & M. Endo (eds.), Studies in
Asian Geolinguistics V, ILCAA, TUFS,
27, 2017

Y. Saito & M. Endo (eds.), Studies in Asian
Geolinguistics IV, ILCAA, TUFS, 32, 2017

遠藤光暁, 東亜言語論稿, 好文出版, 351頁,
2017年

遠藤光暁, 漢語音韻論稿, 好文出版, 327頁,
2017年

遠藤光暁・石崎博志編, 現代漢語の歴史研究,
270頁, 浙江大学出版社, 2016年

遠藤光暁, 元代音研究 『脈訣』ペルシャ語
訳による, 590頁, 汲古書院, 2016年

Mitsuaki Endo (ed.), Studies in Asian
Geolinguistics III, ILCAA, TUFS, 45, 2016

Mitsuaki Endo (ed.), Studies in Asian
Geolinguistics II, ILCAA, TUFS, 71, 2016

Mitsuaki Endo (ed.), Studies in Asian
Geolinguistics I, Research Institute for
Languages and Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies, 93,
2016

Mitsuaki Endo (ed.), Papers from the Third
International Conference on Asian
Geolinguistics, ILCAA, TUFS, 147, 2016

〔その他〕

ホームページ等

<http://agsj.jimdo.com/>

[http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jr
p/jrp210](http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jr
p/jrp210)

<https://publication.aa-ken.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 光暁 (ENDO, Mitsuaki)

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号: 30176804